

鍛冶屋谷たたら遺跡

村の北西部、村境界に近い標高750mの山中にたたら(溶鉱炉)跡をはじめ、金池、元小屋、作業場、山内小屋、金屋子神社、稲荷神社及び従業者の墓地など一連の山内施設(たたら師のむら)の跡が良好な状態で保存されています。

ここは津山藩営鉄山であった大倉山鉄山のうちの一つで、1851(嘉永4)年以後大庭郡上徳山村(現真庭郡川上村)の徳山集蔵が総支配人となって経営にあたっていたこともあります。明治維新後も稼業をつづけ、1887(明治20)年ごろ廃業したと伝えられています。

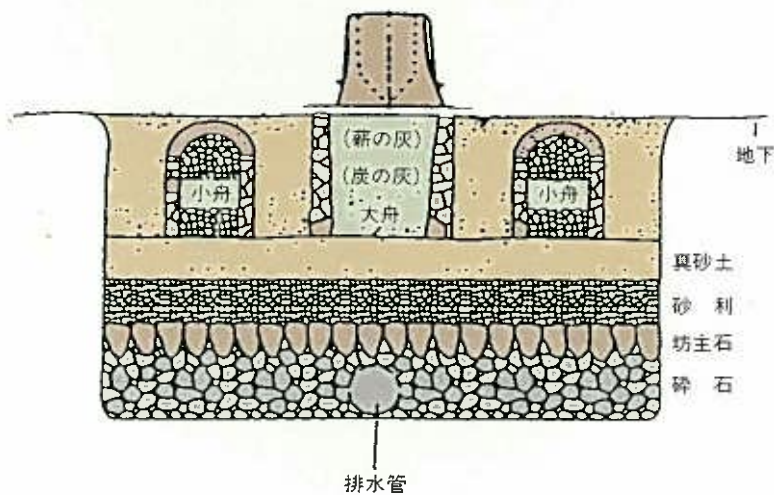
※「村」とは合併以前の「富村」を意味します。



溶鉱炉跡

炉を左右にこわしたあとの盛土が見られます。

ようこうろ こうぞう 溶鉱炉の地下構造想定図



遺跡に残る鉄滓(かなくそ)



金池跡

たたら遺跡 案内図



○たたらとは

たたらとは粘土で築いた炉に砂鉄と木炭を入れ、鞆で風を送り木炭を燃焼させて砂鉄を溶かし、極めて純度の高い鉄類を生産する日本古来の製鉄技術をいいます。

たたら場は、山内とよばれ、村里に近い深い山あいにつくられました。原料となる砂鉄と木炭が大量に手にいれやすく、さらに用水も豊かで、湿気の少ない谷川沿いの小高いところが最もよい場所です。

山内には、事務所にあたる元小屋や米倉などのほか、現場の全責任をもつ村下、その補助役の炭坂、送風装置の鞆をふむ番子、木炭を焼く山子などの従業者たちが生活する住居がたちならんでいました。

たたら場では100人から200人もの人が働き、村の人とは、はなれて操業していました。